内山尚三先生を偲んで

法学部長　鈴木礼暁

自尊のひと

一九八八年一月末、新設法学部の懇親会に出席したあと、近くのスナックに同行したのが、私が内山先生のお人柄の一端に初めて接する機会であった。薄野の中心から少し外れているとはいえ、アルファ札幌の近くの路面は凍りつき転倒の危険が感じられたため、私は、杖代わりにと思い先生の右手を取り、数歩進んだのだが、先生は私の手を振り払われた。前を行く数人の同僚について、スナックまで用心深く歩んでいかれた姿が強い印象として残った。氷上での転倒の回避を、他人に任せられないという咄嗟の判断であったのか、それとも、人の支援を受けずに進むという自立心の現われであったのか、あるいは単に男から手を触られるのが嫌いであったからなのか、そのときの私には特定できなかった。あとでそのことを思ったが、私が手を払う気迫に圧倒され、ただ先生の後ろ脇に従うだけであったこと、先生からその時、手をつなぐばあい危険が倍化することもあるという話がなかったこと、さ

らには諸先輩からの先生についての話を総合すると、内山先生を独立自尊の人と呼ぶのが妥当であろう。

現実的・大局的なひと

同じ年、三月、初めての法学部入試の合否判定が行われた。私は入試専門委員として一六四点、二八四人合格を準備教授会に提案し、了承された。この提案は、一点でも高い位置に合格ラインを置くことが、新設法学部の今後を方向づけるのではないかと言う基本姿勢でなされたものであった。ところが、全学的な入試確定にあたり合格点が一点さげられる結果となり、内山学部長・堺教授ともにこれを承認してきたというのである。準備教授会である以上、教授会決定の意味が相対的なのは当然として、私はいささかの疑念を抱かざるを得なかった。新設学部が定員に満たない場合の問題は非常に大きいからというのが、その時の内山先生の説明であった。そうであれば、三点くらいは下げるのが無難であるのに、一点だけだった事は不可解であったが、結果は、私の案では二人マイナス、大学案では五人プラスであった。この経緯に内山先生がどのような関与を具体的になされたかは不明だが、結果論として、先生が現実的・大局的な判断に立たれていたのではないかと推察し得るであろう。先生はその後もよく、「新学部が先行者より目立とうなどと言う姿勢は厳に慎むべし、」とか、「一〇〇年経つとどんな良い大学でも腐ってくる、」などという意味のことを言われていたものである。

ヒューマニズムと責任感

伝聞であるが、内山先生（この時期は学長）は、本学に入学手続きを済ませた学生が入学前に交通事故により亡

くなったとの報を受け、学長として弔問に行かれたとのことである。札幌大学は、昔から、この種の出来事に対して機敏に対応する体制が整っているとは聞いていたし、事務局の助けにより内山先生が出向いた事かもしれないが、これには、先生のヒューマニズムと責任感が強く働いたのではなかろうか。このような場合、十分ではないとしても、入学金や授業料を返還し、当該関係者もしくは代理が一定の弔意を表す事で社会的責務は果たされるものであろう。しかし内山先生は、それを超える、大学としての人間的姿勢を示す機会と考えたのではないであろうか。

理想主義的行動人

湯川秀樹を中心の一人とする、世界連邦運動に占めた内山先生の役割については、他に適切な人が、適切な場所で語っているであろうから、ここでは、先生の理想主義的行動人としての一面がどのようであったのかを札幌大学での活動と交えて推測してみたい。日高六郎氏かほかの身近な先輩から伺ったことか覚えていないし、裏も取れないのだが、内山先生は、丸山眞男を尊敬し政治家になって新しい社会を作ることを願っていたようである。そんな先生が、健康上の理由から政治家の道を諦めざるを得ず、建設労働者の生活・労働条件改善の視点から建設業法を学んだのであろうことも素人ながら推察し得る。それと並んで、先生は植村環や平塚らいちょうを含み、戦前の経緯をことにしつつも、「世界連邦思想、日本国憲法の精神、核兵器廃絶への願い」(『世界に平和アピールを発し続けて』平凡社、一五頁)を根底にすえた「世界平和アピール七人委員会」にごく自然に共感し、活動し続けられた。このような、理想主義の実践を、先生が札幌大学法学部の運営と等価に考え、淡々と遂行されていたように見えた点が、私の驚きであった。先生にとって、一人一人の学生と向き合う事と、世界平和のために戦う事が、同じ理想

と行動の中に位置づけられていたように思えるのである。

このような先生を、札幌大学初代法学部長としてお迎えできた事は、光栄でありましたが、私たちとしては、内山尚三先生が、常に心がけておられた「学生を大切に」という精神を引き継ぐ所存であります。